



小さな土産話

島崎藤村



太郎もお出。

次郎もお出。

お末もお出。

父さんが、遠い外国の方で聞いて来た土産話をしませう。

一 兎と針鼠

お前達は針鼠といふ小さな動物の名を聞いたことがありませんか。

針鼠は頭も小さく、脚も小さくて、兎から馬鹿に

されたものですから、どうかして兎を懲してやりた
いと思つてゐますと、兎の方から競走をしようと言
ひ出ししました。

ホラ、お前達の唱歌にも、「そんならお前とかけく
らべ」とあるではありませんか。あれは兎と龜との
競走でせう。父さんが今お話するのは、兎と龜とで
なくて、兎と針鼠とです。

廣い島には敵がいくつも續いてゐました。

そつちの敵から兎が馳けだせば、こつちの敵から
は針鼠が馳けだして、どつちが先に向うへ着くか、



明日の朝、その競走をしようといふことになりました。
た。

「よし、そんなら明日の朝だよ。」

と兎が約束して行きました。

針鼠は雄でしたから、自分の巢に歸つて、この事を雌に相談しました。丁度いいことには、この二匹の針鼠は實によく似てゐました。どちらが雄で、どちらが雌か、誰が見ても分らないほど實によく似てゐました。

そこで翌朝になると、雌と雄の針鼠が長い畝の向うの端とこつちの端にゐました。雌の針鼠は兎に知れないやうに向うの畝のかげに隠れてゐたのです。

兎は昨日約束した針鼠と一方の畝のはじに立つて、自分で出掛ける時の相圖までして、それから一緒に馳けだしました。

兎はもう自分が勝つたつもりで、今一息で畝の向うへ馳けつけてやうとする時分になりましたら、雌の針鼠がひよつこり頭をもちあげました。

「兎さん、お先へ失禮。」

とその雌の針鼠が言ひました。

兎はなんにも知らないものですから、そんならもう一度、遣り直し、と言ひ出しました。

「遣り直し、結構。」

と雌の針鼠が言つて、今度は針鼠の方から馳けだす時の相圖をしました。

「一、二、三……。」

兎はまた馳けだしました。ところが向うへ着くか着かないに、雄の針鼠がそこへひよつこり頭をもちあげて、

「兎さん、お先へ失禮。」

と言ひました。

兎は一生懸命になつて、また遣り直し、遣り直し、と言ひ出すうちに、しまひには七十四回も遣り直しました。

そして、七十五回目に、兎はもう力がつきて、倒れてしまひました。



雄と雌の針鼠は、この勝利の獲物を自分たちの巢の方へ運んで行きまして、いゝ御馳走にありつきました、とさ。

二 母

ある娘のお話をしませう。

この娘の伯母さんの家では、庭に苺がつくつてありました。

伯母さんはその苺を大切に、毎日のやうに庭を見廻りました。

娘が庭の方へ行つて遊ぼうとする時にも、伯母さんは娘を呼び留めて、
「苺に氣をつけるんだよ。どれにも觸るんぢやないよ。伯母さんが、ちゃんと勘定して置いたんだよ。」
とさう言はない時はありませんでした。

五分間ばかりも庭を歩き廻つた後で、娘はもう我慢がしきれなくなりました。

「いくら伯母さんだつて、この苺をみんな勘定して置くなんて、そんなことが出来るもんぢやない。」

さう言ひながら、娘は苺を摘んで、四つ五つばかり

りも食べました。そして、さんく遊んだ後で、何知らぬ顔付をしながら伯母さんの部屋の方へ戻つてまゐりました。取つてはいけないと言はれた果實の香氣が自分の唇に残つて居るとは、すこしも氣がつかずに。

「お前さんは、どれにも觸りはしましね。」

と伯母さんが言ひますから、娘は首を振つて見せました。

「そんなら、わたしの側へお出。そこで息をして御覽。」

この伯母さんの言葉には、娘も閉口してしまひました。伯母さんは大きな目の玉をぐる／＼させて、さう申しました。

「御覽なさい、お前さんは毒を食べましたらう。」

毒の香氣で知れました。娘は恥かしい思ひをしなから、自分の過失を白状せずには居られませんでした、とさ。

三 盲目の雀

あるところの奥さんが英吉利の倫敦へ遊びにまゐりまして、よく公園の方へ出掛けました。奥さんはその公園で、編物をしたり、本を讀んだりして、時を送るのを樂みに思ひました。

何故かと言ひますと、そこには静かな樹かげがあつて、木でも草でも新しく、芳い花の香がして來ましたから。そこには、また、木と木の間に湖水が見えて、たいへん景色の好いところでありましたから。

この奥さんが見つけて置いた場所の近くには鳥も澤山に來て遊んでゐました。奥さんは公園へ出掛る度に、パンの片だのお菓子だのを持つて行つて、それを小鳥にくれましたから、いつの間にか小鳥仲間がいゝお友達のやうになりました。

でも最初のうちは、そんなに近くまでは來ませんでした。だん／＼近く來るやうになつて、一週間



ばかりも經つうちにその小鳥が奥さんの手のひらからパンの片を拾ふほど慣れました。

その小鳥の中に、一羽特別に奥さんの目にとまつたのがありました。それは大きな雀で、そして遠慮深い鳥でした。その雀は毎日のやうに來て、投げてやるパンの側に唯ちつとしてゐて、それを拾つて食べようとしません。とき／＼その雀が短く鳴きますと、丁度巢にでもゐるやうに他の雀がパンの片を拾つて行つては食べさせてやりました。

このありさまに、奥さんは心をひかれました。よ

く見ると、その大きな雀は盲目であつたさうです。他のがそれを養つて居たのださうです。お母さんらしい雀や、他の雀仲間が巢にゐると同じやうに附いてゐて、その盲目の雀をいたはつてゐたのださうです。

奥さんは深く心に感じまして、餘計にその小さな鳥の群を可愛がるやうになつたさうです。奥さんは倫敦の旅から歸りまして、あのラスキンといふ公園の雀のことをそれからよく思ひ出しました、とさ。